

沖縄キャンプ 2026 報告・まとめ

出会った人、出会ったことについて

2026 年 7 月 29 日(水)～8 月 2 日(日)

参加者：菅澤邦明、金澤圭子、山地 大、松本奈津子



2026 年 7 月 29 日(水)

ここ数年、沖縄キャンプで最初に訪れるのは、首里の陶芸家松島朝議さんの陶房です。沖縄の土で、沖縄の窯で、沖縄の木（琉球松）で、1300 度を超える高温で焼く松島さんの作品は、一つ一つが特別の風合いでありながら、あくまでも日常の生活の道具です。その作品は、県立美術館の売店や壺屋の古道具屋で、特別の値段で並んでいたりします。7 月 29 日に訪れた時、話しながら、昨年の作品展に訪れた人たちの酒席の写真には、2 人の「人間国宝」と松島さんが並んでいました。

「で、松島さんは？」とお聞きしたところ、おもむろに、もう一枚の古い写真を見せて下さいました。それは、60 年前タオルで顔を隠し、ヘルメット姿で、両腕をお巡りさんに抱えられた松島さんのようでした。たぶん、その時の「前科」が、人間国宝の妨げになっているようです。

10 年程で、少しずつ増えた松島さんの作品は、教会礼拝堂に並べられています。

その首里の松島さんの陶房を訪ねて下さったのが、長堂登志子さんです。辺野古の事故で亡くなった高校生、小型船の船長を追悼する文章で、翁長前知事のことを書きましたが、翁長さんの家に案内してくれたのは長堂登志子さんです。

学校教師の時の教え子が、翁長さんの娘さんということもあって実現することになりました。

那覇から北のキャンプ地・今帰仁に向う途中で立ち寄らせてもらうのが、読谷村の富樫守さんです。60 年前に、神戸で出会っていた富樫さんと 60 年ぶりに再会したのは、名護市辺野古の、新米軍基地建設反対の座り込みの場所でした。

ウチナンチュー 2 世として神戸で生まれ育った富樫さんは、返還・本土復帰で激動の沖縄に「戻り」ます。そうして教師として、働き闘って定年を迎えた時、自宅の庭は、小さな亜熱帯雨林となっていました。

その熱帯雨林の庭と、山原の森を守ることなどが、定年後の生活になるはずだったのに、新米軍基地建設は、それらを許しませんでした。乗ったことのないカヌーに乗り、「果敢」に闘うことになりました。そうだとすると、2 世として神戸で生まれた富樫さんの中に流れていたのは、本来のウチナンチューの「魂（マブイ）」でした。人を思いやり、もてなしの心で生きる富樫さんの周囲には、辺野古の座り込みにヤマトから参加する人たちの幾重もの環が広がって行きました。

今年は、小説・映画の「宝島」の背景になっている、米軍基地内にある「御嶽」にこっそり案内してもらいました。

そんな環の一つに加えさせてもらったのが、公同子どもキャンプの仲間たちです。そして、小さいけれども広がる富樫さんの亜熱帯の森との出会いが、沖縄キャンプの大切な一歩になりました。

2026 年 7 月 30 日(木)

幼いころから、小さな生きものたちが大好きで、その小さい時から、小さな生きものたちの専門家の集りに顔を出したりすることになった、山原の森の専門家である宮城アキノさん、「アキノ隊員」を紹介してもらった

のは、富樫守さんです。数年前のキャンプで、宮城さんの案内で、山原の森を歩くことになっていましたが、体調不良のメンバーが続出して、中止せざるを得なくなりました。

そして、やっと実現した山原の森の体験の為、はるばる車を走らせ 30 日午前、高江の共同売店でお会いできることになりました。その第一部は、高江の川に下りて、少し森を歩くことで、歩き始め、すぐに聞こえてきたのは、ノグチゲラの鳴き声でした。鳴き声に引き寄せられるようにして下りた「清流」で、周囲の森の自然、冷たい川の水で遊んで、皮から上がろうとした時に会ったのが、ハブ・ヒメハブでした。映像などで大きく口をパクリと開け「かま首」をもたげる本物のハブでした。

そして、共同売店の隅っこでの、インスタントラーメンの昼食の後出かけたのが、最近アキノ隊員のもう一つの仕事、山原の森に広く、海兵隊員たちが放置してそのままになっている「ゴミ」の見学です。アキノ隊員は、見つけたゴミを、米軍基地に届けたりするのですが、とても「いやがられて」います。

2026 年 7 月 31 日(金)

夕方、うるまからはるばるキャンプ場の今帰仁まで訪ねて下さったのは、外間永二さんご夫妻です。外間さんは、キリスト教徒として、そうして生きることを誇りにするウチナンチューです。まあ、キリスト教「魂」とウチナンチュー「魂」が同居している、そんな人です。そして、その「魂」を、外間さんに据え付けた、2 人のヤマトンチューが居て、その一人が牧師・桑原重夫、もう一人が牧師・徳永五郎です。この 2 人のヤマトンチューは、沖縄・ウチナーを見つめ、心に刻むことにおいて、決して、沖縄・ウチナーを裏切ったりはしない人間として、ウチナンチュー外間さんも、全幅の信頼を置く人たちでした。

そんな、外間さんの少年・青年時代の沖縄は、米軍支配の中に置かれ、生活のすべてが翻弄される激動の時代でした。その激動の時代の渦中、少年・青年の時代を生きてきたのが外間永二さんで、その魂がみがかれました。

言わば、「不敵」な面構えで、対立している相手を直視する外間永二さんは、少なからず「怖い」と思ったりするかもしれませんが、もしそうだとしたら、その人の中に何か欠けているからかも知れません。その何かは、たとえば、誰かと、あるいは何かと出会っている時の心、身の処し方、沖縄のウチナンチューの言うところの「魂」の欠如かも知れません。

2026 年 8 月 1 日(土)

午前 11 時から、辺野古、キャンプ・シュワブゲート前で、「県民集会」があると、富樫守さんから聞いていたので、参加することになりました。

約 250 人が集まった集会は、辺野古沖で亡くなった高校生と、船長を追悼することから始まりました。

そして、島の各地から集まった人、団体などからの報告が続きました。その一つ一つは、とても、かなり「政治」がからむ内容でした。沖縄について、とにかく政治的な主張が多いと言われたりします。確かに、集まった人、団体などからの報告は、国・政府などの政治・政策に対する抗議が強く語られていました。その意味では政治的なのです。

ただ、その一つ一つは、たとえば兵庫・西宮に住んでいたりすると、どれ一つとっても、起こり得ない事だったように思えます。兵庫・西宮では、すぐその海で、新米軍基地が建設されることも、すぐその米軍基地で、100 デンベルを超える騒音の最新鋭のステルス戦闘機が離着陸することもあります。それらの事で、賛否が問われる知事選が争われることはありません。

青い海に囲まれた、熱帯魚たちの泳ぐその海の島沖縄の人たちを、政治の世界に追い込むものがあるとするれば、政治で翻弄している、日本・政府の政治なのです。

今までの沖縄キャンプの期間中、たとえば、今帰仁村の村まつりと重なって、行事の一つとして必ず「闘牛

大会」がありました。大きな牛が角と角を突き合わせて勝負を決める闘牛は、牛の気分もあって、簡単に闘う牛にならない場合もあり、それを、まあけしかける役が「勢子」と呼ばれる人たちだったように思います。

今回のキャンプ期間中に、どこかでそんな催しがないか捜したが見つかりませんでした。ところが、沖縄の催しを捜すのに、いつも本気の山地大くんが見つけたのが、うるま市の「うるま・あしびなー祭り（エイサー大会）」でした。高速をうるま（石川）まで走り、夕方から夜にかけての催しでしたが、とにかく出かけることになりました。そして、2時間近く、およそ6団体くらいの、本物のエイサーを間近で見させてもらうことになりました。

そのエイサーは、「公同エイサー隊」にとっては、かけ離れた実力の本物のエイサーでしたが、「エイサーって、こんなものだったのか!!」を、改めて考えさせられる機会にはなりました。

エイサーは、旗がしら、チョンダラー、太鼓、女踊りの4つで構成されています。その一つ一つが、バラバラではなく、それぞれの役割を担い合うことによって、「勇壮」なエイサーになっていること、その役割をまざと見せられる、そんないい時間になりました。

今帰仁村のキャンプ場は、沖縄教区が運営・管理するキャンプ場です。元は、恩納村にありましたが、村の施設として必要だったから売却することになり、今帰仁村の元肉牛の牧場を入手することになったキャンプ場です。

このキャンプ場に近い教会が、名護市の名護伝道所です。と言っても、車で30～40分あります。ただ、近いということもあって、日常的な管理は、色々過程はありましたが、名護伝道所の羽柴 禎先生が、主として担っておられます。9000坪の敷地に、肉牛の牧場時代の赤煉瓦の管理棟があって、そのすぐ裏が、海岸（プライベートビーチ）という、沖縄の海で遊ぶには、すっごく恵まれた場所のキャンプ場です。

広い敷地は、芝の広場になっていて、羽柴先生が、定期的にきれいに刈り取っていますから、ボール遊びなど、どんな遊びも可能です。

その広い芝生の広場で、寝っ転がって、たとえば「星座を見つけよう」（文・画：H・A・レイ、訳：草下英明／福音館書店、1969年）を眺め、空を見上げていると、繰り返しているうちに星座の名前も解かってきます。周囲を遮るものもない広場ですから、そんなことも可能なのです。

2026年8月2日(日)

キャンプの最終日は、いつも日曜日です。荷物などを片付けた後、日曜日の朝は、名護伝道所に出かけて、礼拝に参加します。というか、このキャンプは、名護伝道所と「合同」ということで実現しています。施設（キャンプ場）などの予約はもちろん、キャンプの生活で発生する「ゴミ」などの始末はすべて羽柴先生をお願いしています。

何よりなのは、「家族」のように集まっている名護伝道所の礼拝に、家族の一員のように参加させて貰えることです。

礼拝の後の交流会にも参加させていただきました。

そして、その後、昨年も今年も、名護漁港で開催されていた10人で漕ぐ舟の競争「ハーリー大会」の見学をさせてもらい、その後那覇に向かいます。

那覇では、国際通りの牧志公設市場で、少し遅い昼食になりますが、毎年お店は決まっていて、長堂登志子さんの息子さんが経営されている、特別のそばの特別の味の沖縄そばの店「がんじゅう堂」の沖縄そばです。

7月29日(水)



松島朝義さんの工房で、長堂登志子さんと一緒に、今年も素敵な器たちと出会いました。





2019年に火災で焼失した首里城の正殿の復元の完成は、2026年11月だそうです。

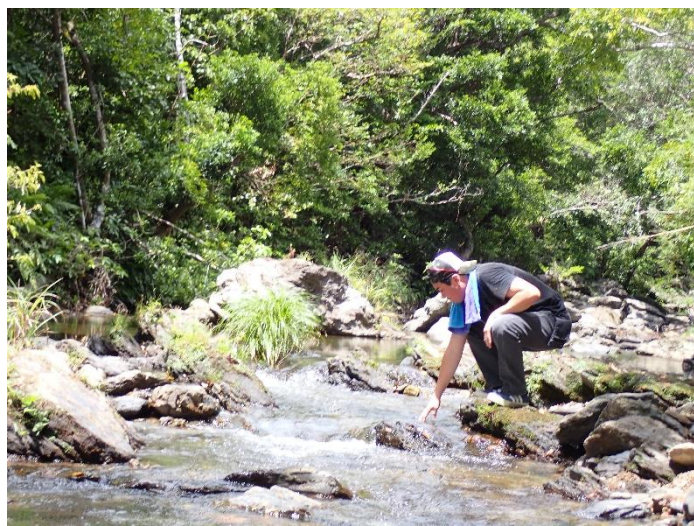


富樫 守さんに、「西森御嶽 (にしむいうたき)」を案内していただきました。琉球の人たちが、古くから神さまに祈りをささげてきた整地だそうです。神事の前後に、神職の女性が御籠もり（おこもり）をする習慣がある。（女性だけが立ち入れる場所）

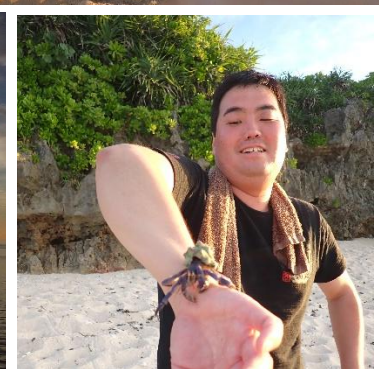
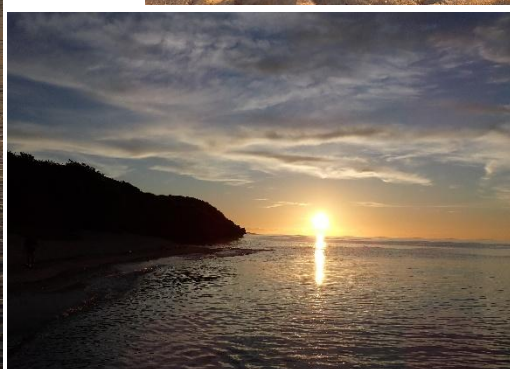
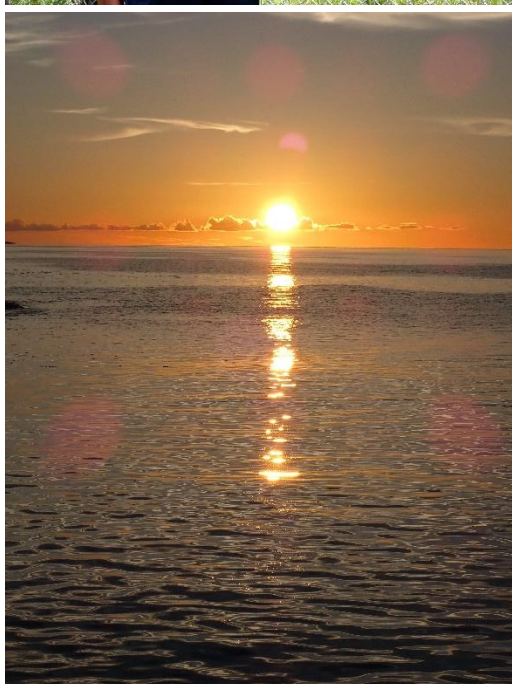
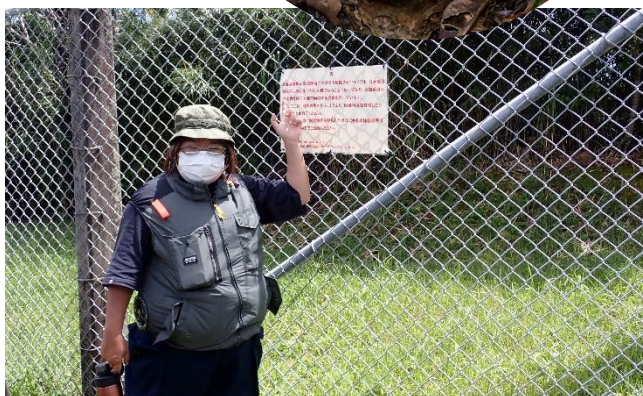


7月30日(木)

宮城秋乃さんことアキノ隊員（チョウ類研究家）に、北部・高江の自然観察と、北部訓練場返還地の案内をしていただきました。



ヒメハブと遭遇！



7月31日(金)



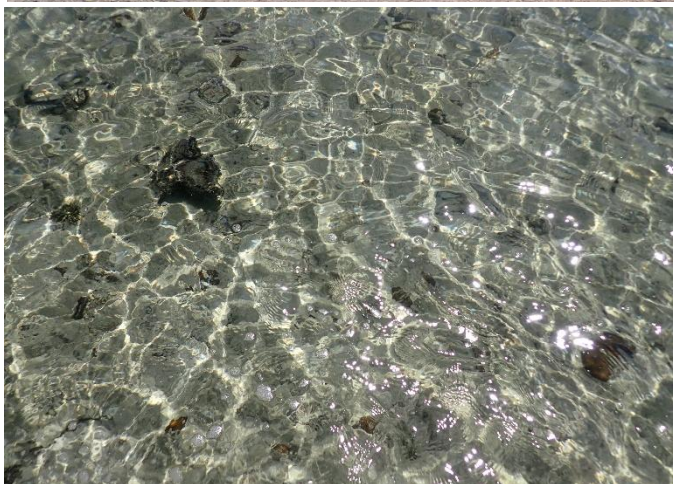
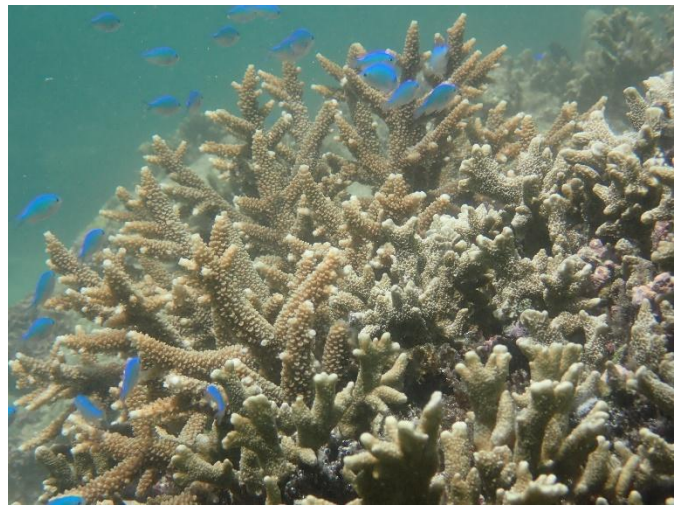
毎年、立ち寄る「グラスアート藍」（名護市）さんです。今年のお土産は、何にしようかな…。



道中で見つけた野生のバナナ。赤い花を咲かせています。



And Lamp（本部町）で、ちょっとお茶タイム。大人旅ならではの…。



うるま市の外間永二さんご夫妻が、今帰仁のキャンプ場を訪ねてくださいました。夕食にナーベラーチャンプルーを作って、一緒にいただきました。



私たちが5日間お世話になった今帰仁のキャンプ場です。
〒905-0424 沖縄県国頭村今帰仁村字仲尾次

8月1日(土)



辺野古ゲート前

月に一回の「県民集会」に参加しました。この日は、580人の人たちが集まりましたそうです。



やちむん喫茶シーサー園（本部町）にて、お茶タイム



「石川 あしびなー祭」を見にでかけました。石川体育館裏 17 時～21 時 主催：旭区青年会



8月2日(日)

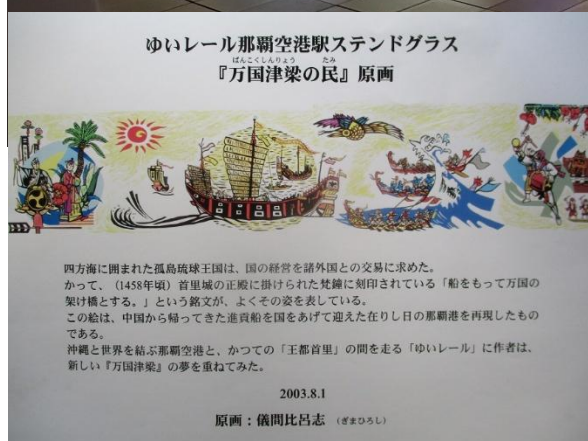
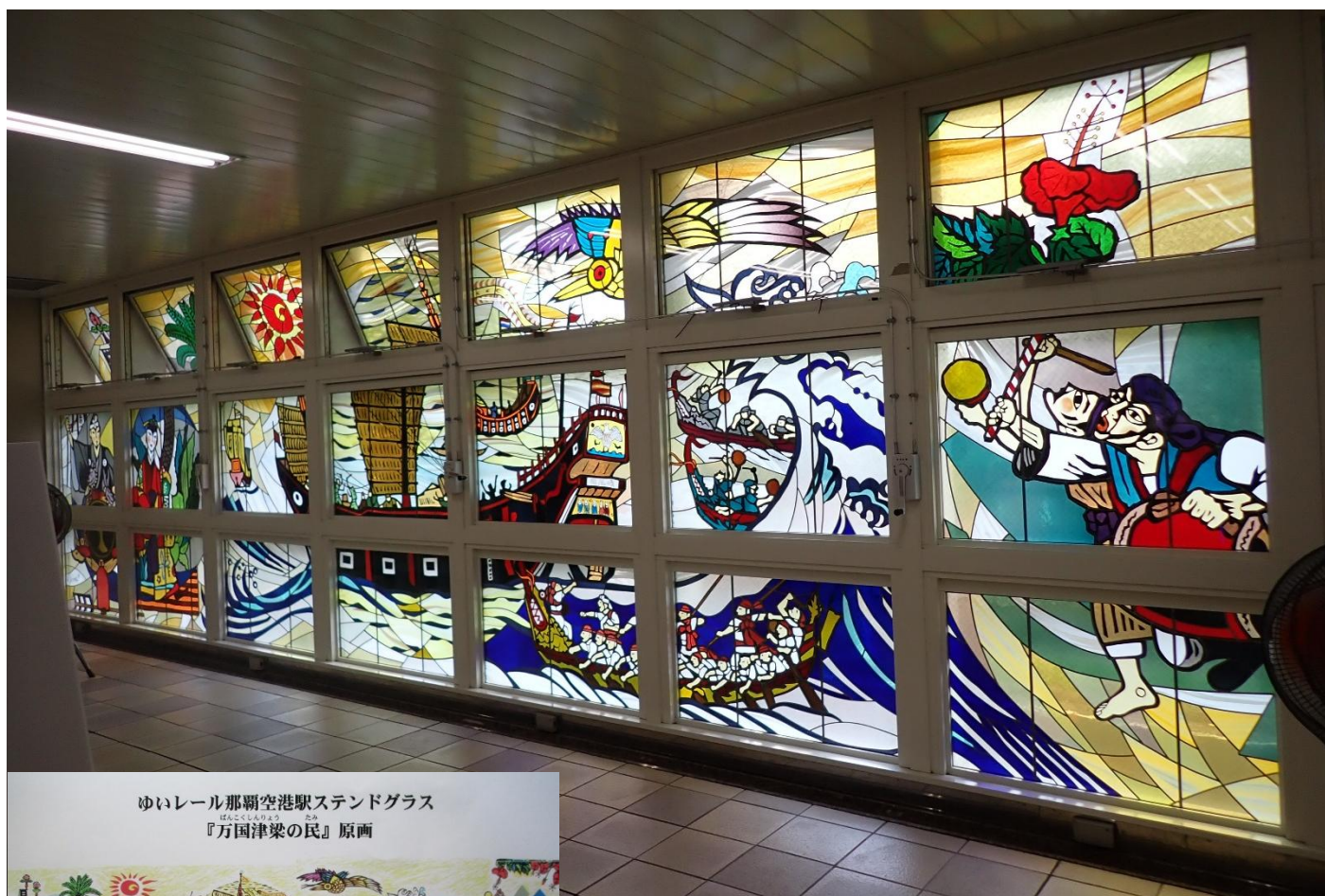
毎朝かかさず行われた「ラジオ体操」。このあと、荷物を片付け、発送。10時30分からの名護伝道所での、礼拝に参加。



名護漁港で行われた「第48回名護市長杯争奪全島ハーリー大会」を見ました。男子だけで、1組3チーム54組、全162チームで予選。朝9時～14時ごろまで予選を戦い、女子は、6組18チームの予選があるそうです。



那覇空港に移動して、ゆいレール那覇空港駅改札口に「万国津梁の民」のステンドグラス
儀間比呂志さんの版画を拡大されたもの



このあと、国際通りに移動し、牧志公設市場にて、最後の「沖縄そば」を堪能。
20時10分発の飛行機で、無事帰ってきました。

今年の沖縄キャンプは、気心の知れた「愉快的仲間たち」4人。いつもとは少し違う、ゆったりとした大人旅の始まりです。

陶芸家の松島さんを訪ね、土に触れる面白さを教えていただいたり、初めて首里城を訪れたり。鮮やかな朱色の壁に目を見張りながら、まだ修復中の姿を見て、秋の完成が楽しみになりました。

読谷村では富樫さんお会いし、昔から琉球の人たちが大切に守ってきた場所（西森御嶽）へ案内していただきました。簡単には人が立ち入ることのできない場所で、その土地に込められた歴史や想いについて、お話を聞くことが出来ました。

次の日には、沖縄北部へ。アキノ隊員と一緒に歩きながら、草木や葉っぱ、生きものたちの話を聞きました。途中では川に足を入れて、ひと休み。自然の中で過ごす、気持ちのいい時間でした。また、その雄大な自然の中にアメリカ軍が残り、捨てて行った色々な残骸（中には弾薬などもあったそう）が残っている場所に案内していただき、ほんの少しですが、そのゴミたちを集めることもさせていただきました。

今帰仁のキャンプ場の目の前には、どこまでも透き通るような遠浅の海が広がっていました。海を眺めながら、何もしない時間を楽しみました。時計を気にすることもなく、沖縄のゆったりとした時間の流れに、心まで委ねるような穏やかなひとときでした。

一方で、今回の旅は美しい自然だけではない沖縄に触れる時間でもありました。

戦争が終わって80年以上が過ぎた今も、その記憶や歴史を抱えながら、今日を生きている沖縄の人たちがいます。辺野古のゲート前では、たくさんの人たちが集まる「県民集会」にも立ち会いました。

美しい海、あふれるような緑、そこに暮らす人たちとの出会い。そのすぐそばに、沖縄が歩んできた歴史と、今なお続いているさまざまな現実があることを、改めて感じました。

そして旅の最後の夜には、うるま市でエイサーのお祭りへ。間近で響く力強い太鼓の音と、全身でぶつかってくるような踊りの迫力に、自然と心が高鳴り、旅の終わりにふさわしい高揚感に包まれました。

もちろん、旅の楽しみは「食」にも。今回の5日間で、なんと沖縄そばを4回もいただきました。お店によって、だしの味も麺も少しずつ違って、「今日も沖縄そば！」と言いながら、これがまた飽きることなく、美味しい。沖縄そば好きの私にとっては、なんとも幸せな5日間でした。

あっという間の5日間。たくさんの人と出会い、いろいろな場所を訪ね、沖縄の自然に触れ、歴史や今を知り、そして海を眺めながらゆっくり過ごす。そして、沖縄そばもしっかり味わう。

学ぶ時間も、心が弾む時間も、静かに自分と向き合う時間もあった、大人4人の「愉快的仲間たち」の沖縄キャンプ。あふれるような自然の圧倒的な美しさと、その中で確かに今を生きる人たちの姿。その両方に出会えたことが、今回の旅で最も深く心に残った体験の一つになりました。

そして最後に、今回5日間を通してずっとご一緒くださった羽柴 禎先生（名護伝道所）をはじめ、お会いしてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。皆さまのおかげで、充実した時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

（金澤 圭子）

今年の沖縄キャンプの4泊5日は、子どもたちがいない大人だけの沖縄キャンプでした。大人だけの沖縄では色々なところに行き、沢山人に出会って、自然に出会いました。何年か前の沖縄キャンプでは、最終日の帰る日には、那覇の国際通りで「10000人のエイサー」をやっているのを観覧しました。ですが、夏の暑さにより10月に変更になってしまい、それ以降、エイサーを見る機会がなくなってしまいましたが、どうしてもエイサーが見たいと思い、キャンプの期間中にどこかでエイサーをやっていないか探してみたところ、8月1日（帰る日の前日）に、うるま市の石川の広場で「あしびなー祭り」という地元の青年会たちがエイサーをするお祭りがあることが分かり、見に行くことになりました。地元の青年会たちのエイサーの演舞は、とても迫力がありかつよく、青年会のそれぞれの違いがあり、もちろん演舞の仕方も違えば衣装も少し

ずつ違い、持っている太鼓も違い、またそれぞれの青年会の味があり、みんな一緒ではないことが分かりました。子どもたちもエイサーに混ざっていて、とても可愛かったです。

(山地 大)

3回目の沖縄キャンプ。那覇に到着して、金澤さんの慣れた運転でいつもの店の「首里そば」へ向かいました。人気のお店の駐車場に、いつものあのおばあさんが元気に受付してくれました。そばをすすって、出しのきいたスープと、トロトロの豚肉を食べて、ああ沖縄の味！去年、来た時、参加していた子どもが「僕はここのそばが好き！」と言っていたなと思いだしました。

そして松島朝義さんの工房へ。いつも奥様が冷たいシークワサーージュースを用意してくださり、汗が引いたところで 松島さんの作品を見せていただいたり、お話を聞いたり、ゆったりとした時間を過ごしました。

子どもたち用にと、粘土状の赤土を用意してくださっていて、コロコロと丸めながら、乾燥させて焼いたらおもしろいよ。とお土産にいただきました。沖縄の赤い土は、移動の時に車窓から見える畑で、よく見られます。土の色がほんとに赤いことに興味がわきました。

松島さんと別れた後は、菅澤先生の長年のお知り合いの富樫さんにお会いし、特別な場所にご案内いただきました。御嶽（うたき）という、木や岩などの自然の神様を祀る神聖な場所が、昔から沖縄の集落ごとに大切に守られている場所でした。すぐそばに、アメリカ軍の基地が建設されているので、自由に入りにくくなっていて、地元の人しか入れないところを案内していただき、貴重な体験となりました。夕飯とたくさんのフルーツをごちそうになり、先生たちの話を聞かせていただきながら、あっという間の初日でした。

沖縄の森林の蝶の生態を研究しているアキノ隊員に国頭村の森を案内していただきました。私は見逃しましたが、天然記念物のノグチゲラが見えたそうです。そして、そんな森のすぐ近くに、アメリカ軍が廃棄した瓶や火薬の破片などのごみの塊がありました。アキノ隊員は、自然を守る活動の延長線にアメリカ軍の廃棄物の調査も行っておられるすごい方でした。

辺野古の集会にも参加させていただき、平和への思いを持って行動されている方々の話も聞けました。

キャンプ場の朝は、芝生の上でラジオ体操から始まり、朝晩は海風が心地よく、朝は寒くて扇風機を止めるほど、夜は波の音だけが聞こえてきます。満月が輝いて、夜中は北斗七星もきれいに見えました。午後の引き潮の時間に、海にも潜ってカラフルな熱帯魚と戯れ、急いで夕食の下ごしらえした後に、また海へ降りて夕日を見に行ったり、自然の中でゆったりとぜいたくに過ごしました。

菅澤先生のたくさんのお知り合いの方々を通して、沖縄の方との交流や、文化や自然に触れ、また北へ南へと車を走らせてくださった金澤さん、沖縄キャンプ歴 10 年以上？のベテランの山地くん、そして、いつもキャンプ場をきれいにしておいて迎えてくださり一緒に過ごしてくださった羽柴先生、送り出してくださった皆様、いろんな方に支えられた沖縄キャンプでした。

ありがとうございました。

(松本 奈津子)

(付記)

このキャンプでは、沖縄の人と自然をたっぷり体験し、遊ぶことが何よりも尊重されてきました。

そのことはもちろんですが、別の課題があって、三宅島や飯館村の子どもたちに届ける組み木の材料になる板（琉球松）を、国頭村森林組合を訪ねて、入手することでした。ところが 2 年前から、「難しい！」と、言われてしまいました。組合の倉庫に積み上げられていた大量の板を、どこかで使うことになったらしいです。

とても大量の板でしたから、「まさか…」と思っていたのですが、どうやら、それを使うことになったのは、新増設された国頭村にある「やんばる森のおもちゃ美術館」らしいのです。で、その様子を見るために、美術館を訪ねてみることになりました。ただ、あいにく「休館日」だったのですが、ガラス張りの窓から覗いてみると、

床が琉球松のフローリングであることが解かりました。で、解かったのは、あの大量の森林組合の板が、どう見ても全部は使われていないということでした。

よく乾燥した木目のきれいな琉球松の板は、これからも、あきらめずに組み木に使わせてもらいたいと思っています。

(菅澤 邦明)

みるく ゆ が ふ

弥勒世界報

作詞：佐原一哉／古謝美佐子 作曲：坂本龍一

- 1 海ぬ美（ちゅ）らさ 青い海ぬ美（ちゅ）らさ
我（わ）した島ぬ 永遠（とうわ）ぬ宝 永遠（とうわ）ぬ宝
- 2 空（すら）ぬ深さ 碧い空（すら）ぬ深さ
我（わ）した沖縄（うちなー） いちまでいん いちまでいん
- 3 花ぬ美（ちゅ）らさ 鳥（とうい）ぬ声（くい）ぬ清（しゅ）らさ
美（ちゅ）らぬ島ぬ 想（うむ）い知らさ 想（うむ）い知らさ
- 4 人（ふいとう）ぬ秀らさ 肝（ちむ）持（む）ちぬ秀らさ
肝（ちむ）心（ぐくる） 玉ぬ命 玉ぬ命
- 5 神々宿（やど）る 沖縄（うちなー）ゆでむぬ
世界（しけ）ぬ世界報（ゆがふ）守てい給（たぼ）り 守てい給（たぼ）り
- 6 波ぬ想（うむ）い 太陽（ていだ）とう風（かじ）ぬ想（うむ）い
戦世（ゆ）ぬ 哀り知らさ 哀り知らさ
- 7 忘（わし）てい忘（わし）ららん 戦さ世（ゆ）ぬ哀り
童達（わらびんちゃん）に 語てい行かな 語てい行かな
- 8 星（ふし）ぬ光 我（わ）した地球（ふし）ぬ光
弥勒（みるく）世界報（ゆがふ） 願（ぐわん）立ていら 願（ぐわん）立ていら
- 9 印無（ね）えらん くぬ島どうやしが
平和ぬ想（うむ）い 深さあむぬ 深さあむぬ
- 10 人（ふいとう）ぬ命（ぬち）や 天（ていん）からぬ恵（みぐ）み
永らいてい 命（ぬち）どう宝 命（ぬち）どう宝
- 11 地球（ふし）ぬ姿（しがた） 変わる事（くとう）ねさみ
変わるむぬや 人（ふいとう）ぬ心 人（ふいとう）ぬ心
- 12 人（ふいとう）とう人（ふいとう）ぬ 争いや捨（し）ていてい
世界（しけ）ぬ平和 真に想（うむ）い 歌てい願（にが）ら
語てい願（にが）ら 歌てい願（にが）ら